



### EXPO'70パビリオン

(大阪府吹田市)

EXPO'70パビリオンは万博記念公園にある1970年大阪万博の記念館だ。当時のパビリオン「鉄鋼館」を生かした建物で、展示の中心は「スペースシアター」。多数の球形スピーカーが取り付けられ、宇宙空間を思わせる円形劇場をガラス越しに見ることができる。階段に書かれた入場者数4位のパビリオンには意外な国名も。ロビーでは現在、2025年の大阪・関西万博につながる3Dや仮想現実(VR)を使った体験型の企画展が開かれている。(松浦弘昌)

映えスポ



「NIKKEI 関西」  
Instagramでも  
<https://www.instagram.com/nikkeikansai/>

## KANSAI Timeline

「基本問題を考えなさい」と言われた。上っ面の研究ではダメだという意味で、私にとっては人間とは何かを考え抜くことが基本問題だ。

■阪大大学院時代に、国際電気通信基礎技術研究所(ATR、京都府精華町)で今日まで続く研究活動を始め、けいはんな学研都市にあって奈良県に近いATRでは、多くの著名な研究者とつながりができ、強力な人脈を培うことができた。1994年には京都大学大学院に助教として

■ロボット工学の第一人者で、大阪大学栄誉教授の石黒浩さん(58)は滋賀県で生まれ、関西の2府4県全てに関わってきた。関西の歴史や文化、自然を愛し、最先端のロボットやアンドロイドの研究、開発に取り組んでいる。

滋賀県高島市で生まれ、高校まで過ごした。自然が豊かで、子供の頃は山でマツタケを探り、クワガタを捕まえるなど、生命と触れあう機会に恵まれた。風景画など絵を描くのが好きで、画家になろうと思ったこともある。

小学5年生のとき、親か先生に「人の気持ちを考えなさい」と叱られた。これをきっかけに、人とは何か、気持ちとは何か、考えるとはどういうことかと自問するようになった。人間とは何かを追究するためにアンドロイドをつくる今日につながっている。

大学は山梨大学の工学部計算機科学科に進んだ。コンピュータに関心をもっていたからで、ロボットの研究も始めた。その後、大阪大学の大学院に移り、やはりロボット研究で有名な辻三郎先生から「基本問題を考えなさい」と言われた。上っ面の研究ではダメだという意味で、私にとっては人間とは何かを考え抜くことが基本問題だ。

■講義などで週に1回程度は東京に行くが、住みたいとは思わないという。

関西には山や海、湖などがあって地形が起伏に富んでいる。奈良の盆地や大阪の海、琵琶湖のほとりといったように。東京はだだっ広い関東平野があって地形に変化が乏しい。人も多すぎて東京に住んでも落ち着かない気がする。

現在の研究拠点である阪大はオープンで、産学連携が自由にできる。大阪は東京に比べて人口が少なく、地元で根付いた人がいて人間関係が濃い。研究テーマごとに連携すべき人とすぐにネットワークができる。市場規模や国際性では東京に見劣りするが、大阪は新しいものを生み出すのに適した場所だ。

大阪で創造して東京で花開くパターンがもっと増えれば大阪の役割がはっきりする。今後はリモートワークを可能にするインターネットをつましく利用し、街の魅力を高める必要があるだろう。

2025年の国際博覧会(大阪・関西万博)ではテーマ事業プロデューサーを務める。1970年の大阪万博と違い、遺伝子操作や義手・義足の技術進歩などで人間が人間をデザインできるような環境対策もそうだが、50年前は神様に任せていたことに人間が責任を持たなければならぬ。どんな未来が望ましいか、人によって価値観は異なるので、多様な未来の選択肢を示すのが25年万博の使命になる。(聞き手は塩田宏之)

# 濃い人間関係 大阪の魅力



人間とは何かを追究するために、自分に似せたアンドロイドも開発した



して招かれ、石田亨先生に「社会を変える研究をしなさい」と言われた。人と関わるアンドロイドの開発などがそれで、今も辻、石田両先生の課題に向き合っている。

米カリフォルニア大学で客員研究員を務めた後、和歌山大学に招かれた。現在は神戸大学などの交流で時々神戸に赴くので、関西2府4県全てに関わりができた。

関西は日本の起源に近い歴史があり文化もある。鎌倉時代の彫刻家、運慶をテーマにしたNHKの番組に出演したことがあるが、彼は自分の中の基本問題を探究するために仏像を彫っており、私がアンドロイドをつくるのと、ほとんど同じマインドを感じた。

## ロボ研究、連携自在に

運慶が今の時代に生きていれば絶対に話が合うと思う。

■講演などで週に1回程度は東京に行くが、住みたいとは思わないという。

関西には山や海、湖などがあって地形が起伏に富んでいる。奈良の盆地や大阪の海、琵琶湖のほとりといったように。東京はだだっ広い関東平野があって地形に変化が乏しい。人も多すぎて東京に住んでも落ち着かない気がする。

現在の研究拠点である阪大はオープンで、産学連携が自由にできる。大阪は東京に比べて人口が少なく、地元で根付いた人がいて人間関係が濃い。研究テーマごとに連携すべき人とすぐにネットワークができる。市場規模や国際性では東京に見劣りするが、大阪は新しいものを生み出すのに適した場所だ。

大阪で創造して東京で花開くパターンがもっと増えれば大阪の役割がはっきりする。今後はリモートワークを可能にするインターネットをつましく利用し、街の魅力を高める必要があるだろう。

2025年の国際博覧会(大阪・関西万博)ではテーマ事業プロデューサーを務める。1970年の大阪万博と違い、遺伝子操作や義手・義足の技術進歩などで人間が人間をデザインできるような環境対策もそうだが、50年前は神様に任せていたことに人間が責任を持たなければならぬ。どんな未来が望ましいか、人によって価値観は異なるので、多様な未来の選択肢を示すのが25年万博の使命になる。(聞き手は塩田宏之)

石黒浩さん(58)は滋賀県で生まれ、関西の2府4県全てに関わってきた。関西の歴史や文化、自然を愛し、最先端のロボットやアンドロイドの研究、開発に取り組んでいる。

滋賀県高島市で生まれ、高校まで過ごした。自然が豊かで、子供の頃は山でマツタケを探り、クワガタを捕まえるなど、生命と触れあう機会に恵まれた。風景画など絵を描くのが好きで、画家になろうと思ったこともある。

小学5年生のとき、親か先生に「人の気持ちを考えなさい」と叱られた。これをきっかけに、人とは何か、気持ちとは何か、考えるとはどういうことかと自問するようになった。人間とは何かを追究するためにアンドロイドをつくる今日につながっている。

大学は山梨大学の工学部計算機科学科に進んだ。コンピュータに関心をもっていたからで、ロボットの研究も始めた。その後、大阪大学の大学院に移り、やはりロボット研究で有名な辻三郎先生から「基本問題を考えなさい」と言われた。上っ面の研究ではダメだという意味で、私にとっては人間とは何かを考え抜くことが基本問題だ。



石黒浩さん 大阪大学栄誉教授

いしぐる・ひろし 1963年滋賀県生まれ。91年大阪大学大学院・基礎工学研究科・博士課程修了。現在は大阪大学栄誉教授、ATR石黒浩特別研究所客員所長(ATRフェロー)。著書に「アンドロイドは人間になれるか」など。